

建設の碑

高原開発恩賜之碑

清里高原開発の跡

ホ

ワイトクリスマスもよろしかろうと、同行者の手を引いて八ヶ岳南麓の清里高原へと向かった。JR清里駅に降り立てば、ほどよく雪が積もっており、これは目論見があたつたと内心ほくそ笑んだ。しかし、現地の人によれば、大体この時期は八ヶ岳で雪が落ちてしまい、例年ほとんど積もらないそう。標高一、三〇〇ほどの高さだから、間違いなかるうと大して調べもせずに来たが、この積雪は全くの幸運だったわけで、あきれはてた同行者の視線をこめかみに感じながら、「萌木の村」を目指すことにした。

清里といえば、かつて避暑地として、また恋人たちの聖地として一大ブームとなり、多くの観光客が訪れた。いまでも駅前には当時を彷彿とさせるバブル建築が立ち並ぶが、いささか時代に取り残された感があつた。

「萌木の村」は、欧米の山小屋をモチーフにしたレストラン、雑貨店、宿泊施設などが中央広場を囲んで分棟配置されている観光施設であり、清里駅から北へ二キロほどの清泉寮やキーブ農場とならぶこの辺りの名所となっている。しかし、真冬だからか人気がなく、中央広場に設えられたトナカイとサンタクロースのオブジェもぼつんとしていた。

サクサクと雪を踏みしめ広場を渡り、「萌木の村」の南のはずれへ歩いていくと、この村のコンセプトとはかけ離れた小規模の日本霊園があつた。霊園入口に建てられた掲示板を読むと、どうやらここは清里高原の開拓者たちが眠る「八ヶ岳霊園」であることがわかった。

昭和初期、当時の東京市は発展を続けており、急速に膨らむ人口を潤すべく、第二次水道拡張事業として多摩川上流に小河内ダム^{（注）}の建設が計画された。ダム建設予定地の山梨県北都留郡丹波山村、小菅村の村民二八戸は、約二百万人の東京市民のためと故郷を離れこの地へ入植したが、資機材に乏しく、収穫皆無の惨状や厳しい寒さに高齢者や幼い子供が倒れたという。この霊園は入植三年を記念して昭和四十六年に整備されたもので、霊園中央には開拓を指導し、物心両面から入植者の支えとなった八ヶ岳開墾事務所長の安池興男氏へ捧げられた「開発恩賜之碑」が建てられている。

奥多摩の山々が好きな私は、碑文を読みながら軽いショックを受けていた。小河内ダムによって造られた奥多摩湖を見るにつけ、この地を離れた人々はどこへ行ってしまったのだろうか、漠然と考えていた。決して楽しい話には行き当たると、あえて

調べることもなかったが、「清里ブーム」の浮ついた熱狂の奥底に、彼らの苦闘の歴史があつたとは、うかつなことに思いもよらなかつた。

南アルプス連峰や富士山の秀麗な姿、そして八ヶ岳の威容を望む美しい風景を、故郷を追われた人々ほどのような想いで見つめていたのだろうか。雲間からの陽光に輝く山々を眺めながら、一縷のなぐさめになったことを祈った。

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館

江口知秀
Tomohide Eguchi



高原開発恩賜之碑

[交通] JR清里駅から徒歩15分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。